大阪商業大学学術情報リポジトリ

平賀源内の海外認識
―十八世紀日本における「異国」―

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1291

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

平賀源内の海外認識

―十八世紀日本における「異国」―

石上　敏

1、はじめに ― 平賀源内の十八世紀
2、オランダ（阿蘭陀）
3、ロシア（露西亜）
4、朝鮮と中国（清）
5、深井浅之進の冒険
6、思想と文学をめぐる状況
7、おわりに ― 今後の課題

1、はじめに ― 平賀源内の十八世紀

平賀源内は、十八世紀を生きた人である。小伝馬町の牢獄で死去したのが安永八年十二月十八日（西暦一七八〇年一月二十四日）であることは諸史料の記述が一致しており、疑う余地はない。一方、生年は諸説あって一定しないが、享保十四年（一七二九）生まれの可能性が高い。[1] すなわち、西洋暦（太陽暦・グレオリオ暦）によれば一七二九年に生まれ一七八〇年までを生きた人であり、[2] 源内の生きた時代は十八世紀の

前期から後期までということで丸々十八世紀に収まっている。

その十八世紀に焦点を絞るならば、同時代を生きる日本人の目に映じた「異国」としては、まずは清国（中国）、そして林子平の『三国通覧図説』に描き出された近い異国としての三国、すなわち朝鮮・琉球・蝦夷がある。[3] その周辺を、露西亜（ロシア）、越南（ベトナム）、暹羅（シャムロ）（タイ）などの中間的な異国が取り囲み、さらにその外側に天竺（インド）や阿蘭陀（オランダ）などの遠い異国が位置していた。これらが、基本的に同心円を描いて「日本」を取り巻いていたという構図を描くことができる。[4]

それらの中でも朝鮮と琉球は、いわゆる朝鮮行列・琉球行列という可視的な形をとって、しばしば見える異国と化した。[5] 源内の時代にも両国の行列は世上を賑わせ、この点で、これら二つの異国は蝦夷とは大きな違いがあった。何年か、あるいは十何年かに一度訪れるイベントとして、それらの行列は特に中継地沿道と江戸の人びとを浮き立たせた。とはいえ前者、すなわち朝鮮通信使が「唐人行列（とうじん）」と呼ばれ、「唐子（からこ）踊り」が長く中国のものとして記憶にとどめられたように、[6] 朝鮮と中国との区別は必ずしも明確ではなかった。むしろ曖昧であったと言うべきだろう。それはなお現在に至っても、たとえば「唐」と「韓」を両抱えにした「カラ」という音声の中で不可分に融合している。また琉球にせよ、世間一般からは時に中国と混同されて受け止められた。[7] そのように、まず日本人の意識には中国（明・清）があり、時代を降るに連れて朝鮮王国（李氏朝鮮）や琉球王国が次第に明瞭に意識されてゆくという経緯をたどった。

源内が、その戯作文中においてしばしば記述した独特の文章、いわゆる「平賀ぶり」の著名句に、「唐（カラ）も日本（ヤマト）も、昔も今も」というものがある。「古今東西」という言葉は現在もまだ通用しているが、源内は空間の極点である「あそこ」（遠称）を示す詞として「唐」を、「ここ」（近称）を表わすのに「日本」を用い、時間の象徴的極点である「昔」と「今」とに対比させて示したのである。このように、十八世紀の源内の（文章的）口癖のなかにも「唐」が存在した。以下に示すように、十八世紀の日本人としては異例なほど多くの異国情報に触れる機会を持った平賀源内ですら、「唐」という一言で包括的に「異国」を示したのである。[8] 本稿では、遠い異国からオランダ、中間的な異国からロシア、近い異国から朝鮮と中国（清）を選び、主に平賀源内の視点を通じて十八世紀の「異国」認識について考察して行きたい。

二

2、オランダ（阿蘭陀）

江戸幕府が採用した海禁政策は、近世後期の蘭学者・志筑忠雄の『鎖国論』（一八〇一年）によって現在「鎖国」と呼ばれるが、この呼称が当初から存在したわけではない。[9] また、鎖国とはいえ周知のごとくキリスト教布教の懸念がないオランダと、中国（明・清）は継続して貿易相手国に選ばれた。オランダは原則的に一年に二隻、中国は二十隻の貿易船に限って[10]当初は平戸、次いで長崎に限定して交易がおこなわれた。出島と呼ばれる扇面形の人工島にのみオランダ人（阿蘭陀商人）が滞在を許されたのに対して、中国人（明商・清商）は長崎市内の一角をあてがわれ、いずれも周囲から隔絶された範囲で多くの制約を受けて生活した。また、出島の駐在員は貿易にのみ携わる商人ではなく、条約の締結などを委託されていたが、日本に対して国家間の交渉は一切おこなわれなかった。

オランダ人は長崎に滞在する間、原則的に出島から出ることは許されなかったが、時代が降るに従って制約の度合いは強度を減じた。たとえば文政六年（一八二三）に外科医（軍医少佐）として二十七歳で来日したシーボルト[11]は出島外での診察を許され、自宅に医学の塾（鳴滝塾）を開設した。そして、「オタクサ」（お滝さん）と呼んだ楠本たき（源氏名は其扇（そのぎ））とのあいだに、いね（のちに医師として長崎や江戸で開業）を儲けている。国外への持ち出しを禁止されている地図などの文物を帰国時に持ち出したことが発覚し、いわゆる「シーボルト事件」に発展したことで規制は強化された。シーボルト以外にも長崎の遊女との間に子をなす「異人」は少なくなかったという。[12]

出島の「阿蘭陀人」たちは、将軍への謁見のために毎年長崎と江戸の間を往復し、「阿蘭陀行列」や「南蛮行列」、さらには商館長である「カピタン」（キャプテン）の名を以て「カピタン行列」などと呼ばれた。[13] 毎年春の江戸参府は、いわば年中行事と化し、道中や滞在先で好奇の目を向けられて見世物と化したのである。[14] たとえば葛飾北斎の絵本『画本東都遊（えほんあずまあそび）』（一八〇二年刊）には、江戸の彼らの定宿である長崎屋を覗き込む日本人が描かれており、[15] 大槻玄沢の『蘭説弁惑』（一七八八年序、一七九九年刊）には、「南蛮人は犬のように小便をする」とか、「彼らには踵（かかと）がない」などといった当時の巷説（噂）が書き留められている。

源内の出身地は四国の高松藩内（現・香川県東部）であったため、「カピタン行列」とは無縁であったが、父親は下級藩士（蔵番）として高松藩に出仕していたので、国際的な情報と全く無縁・無接触に暮らしたというわけではなかった。平賀家は源内の代で高松藩を致仕（退職）し、地域の名士である岡田家から権太夫を入婿に迎えて民間人として暮らしたが、[16] 志度（現・さぬき市）に建てた屋敷内で醸造をおこなうような比較的裕福な家庭であった。かつては一国一城の主であった平賀家の再興を願ってのことであろう、兄二人を亡くして嗣子（跡継ぎ）

四

となった三男の源内に対して学習機会がふんだんに与えられた。源内も自宅から約六キロ離れた高松藩儒の家塾まで勉学のために通い、遠縁の三好家で製陶技術や本草学の基礎などを学んで、十二歳の頃には「お神酒天神」と名付けられた細工物（神酒を供えると、紙の移動によって天神の顔が赤く染まる）を作成するなど、よくその期待に応えたといえる。対岸との海上交通も頻繁であった志度周辺の文化度は高く、運送業・製塩業などで財を成した地方名士が携わる文化サロンも存在した。源内は、十代半ばの頃から彼ら地方文化人たちに交じって俳諧に遊び、二十代の半ばには志度俳壇の顔役のひとりになるなど、年少時から文化的・経済的な地域社会の動向に触れる機会に恵まれていた。そして、地元の有力者が長崎に滞在する際の付き添い（一年の滞在であり、源内にとってはいわば内地留学）に選ばれるという願ってもない機会が訪れたのは宝暦二年（一七五二）、数え年二十四歳の時であった。[17] 最初に長崎遊学を果たしたといわれる前野良沢をはじめ、後年交流をもつことになる蘭学者たちの誰一人として、未だ長崎留学を果たしていない時期のことである。[18]

のちに、それらの蘭学者たちの活躍によって「阿蘭陀人」の正確な情報が流布するに至るまで、彼らは中世以来の呼び方で「南蛮人」と呼ばれることが多かった。東インド会社の東アジア進出拠点であるジャワ島のバタヴィアを足掛かりとして日本への進出を果たした彼らは、確かに「南」からやってきたが、出発点は西である。むしろ出身地は「北」の人たちが少なくなかった。それでも日本人の大半は彼らを「南蛮人」と呼び習わし、「南から来る人」というイメージを持ち続けたのである。しかし、彼らは日本人を脅かしにやってくる人々なのではなく、長崎の出島に逗留し、年に一度「見世物」となって将軍のご機嫌取りにはるばる江戸までやってくる人々であった。いわば、最も遠い異国である阿蘭陀からの到来者が身近な見世物となることで、この時代の「異国」は独特の遠近感を日本人一般にもたらしたといえる。[19]

中世以前にキリスト教を携えて日本に進出したスペイン人やポルトガル人を「南蛮人」、おくれてやってきたオランダ人やイギリス人を「紅毛人」と呼んだともいうが、近世期の国内史料に拠る限り、彼らを峻別した形跡はほとんどない。そもそも限られた専門職（たとえば通詞や交易商人など）以外に、彼らの出身国を弁別するすべを持つ日本人は、ほぼ存在しなかった。頭髪の色調によって「紅毛」と「南蛮」を呼び分けたというのは、十八世紀以降にオランダ人を「紅毛」と呼ぶ共通認識が比較的多数の日本人に定着していたからで、それは後藤梨春の『紅毛談』（一七六五年刊）や森島中良の『紅毛雑話』（一七八七年刊）といった啓蒙書によって、彼らが決して「南」から来る者たちではないことを多くの日本人が知ったからにほかならない。『紅毛談』を「オランダばなし」と読ませたように、「紅毛」は、ほぼ「オランダ」と同義であった。梨春や中良といったこの時代を代表する本草学者や蘭学啓蒙家は別として、彼らの毛髪の色を観察し、呼称を以て弁別していた者が当時の日本人の中にはたしてどれだけいただろうか。ちなみに琉球人は西洋人全体を「ウランダー（オランダ）」と呼び、その呼称は日本への併合（い

わゆる「琉球処分」）以降も長く続いて、占領軍以来のアメリカ人を呼ぶ「アメリカー」へと移行した。

後藤梨春は、のちに「人参博士」と呼ばれる本草学者・田村藍水の高弟で、同門の平賀源内の代表作である『物類品隲』（一七六三年刊）に序文を寄せるなど源内と親しかったことで知られている。一方の森島中良は源内の戯作の一番弟子であり、風来山人の戯号で知られた源内の戯作文体を後代（たとえば式亭三馬）に伝えたことで知られる。[20] 彼らの啓蒙によって阿蘭陀人は身近にはなったが、やはり基本的には「見世物」の対象にすぎなかった。

近世から近代に至る歌舞伎の名跡・市川團十郎の「つらね」に「東夷南蛮北狄西戎（とういなんばんほくてきせいじゅう）、天地乾坤四夷八荒（てんちけんこんしいばっこう）の隅々まで、鳴り響いたる歌舞伎の華」（歌舞伎十八番の内『暫』）とあるように、本来は「外」からの侵入者・侵略者（外夷）の名称であった「南蛮」という言葉の本意は、十八世紀には形骸化していた。[21] 確かに「西」には朝鮮があり、「南」には琉球があって、長崎からは定期的に「南蛮」がやってきたが、むしろ彼らは将軍に忠誠を尽くす「飼い馴らされた異国人」として日本人の見世物であり続けた。出島の南蛮人の隔離は厳格であったが、彼らは行列をつくることで見世物となり、その一方で長崎の限られた区域に居住地を指定された中国人（明人・清人）たちは、大多数の日本人の前に姿を現わすことはなかった。そのため多くの人びとは「朝鮮」「琉球」からの類推によって「唐（支那）」をイメージし、しばしばそれらは混同された。ただし、蘭人・蘭学者との交流を有した源内の場合、はやくから世界地図を目にし、一時は所有する機会すら持っただけに、[22] 以下に見るようにアジアはもちろんのこと、当時の日本人が実在と非実在を区別することができなかった世界各地の「国」を誤認し、混同することはなかった。

たとえば、のちに詳述する『風流志道軒伝』（一七六三年刊）では、「蝦夷・琉球」に続けて、「莫剛爾」（モンゴル）・「占城」（ベトナム）・「蘇門塔剌」（スマトラ）・「浡泥」（ボルネオ）・「百児斎亜」（ペルシア）・「莫斯哥米亜」（モスクワ）・「琵牛」（ペギュー）・「亜剌敢」（マラッカ）・「亜爾默尼亜」（アルメニア）と列挙した最後に「天竺」（インド）・「阿蘭陀」（オランダ）を並べている。吉宗によって進められた蘭書の限定的な輸入策に応じて到来した『四十二国人物図説』（一七二〇年刊）などを援用したものとされるが、それにしても、一七六〇年代当時にこれだけの外国地名（国名・島名・都市名・地域名）を列挙できる日本人は、一万人に一人にも満たなかっただろう。

江戸幕府が異国の動向に神経を尖らせた幕末に至って情報収集の重要性に気づく以前から、彼らは日本からの情報収集のために江戸参府は欠かせないと考えていた。すなわち日本にとって、そのようにやってくる外国の人びとが一義的に見世物の対象であったという弛緩した視線の修正を余儀なくさせたのが、「幕末」と呼ばれる時代であった。そしてそれは、十八世紀の帝政ロシアによる東アジア南下政策によって始

まった。「幕末」とは、十八世紀を過ぎて十九世紀に至る時代であるため、行論上しばらく十九世紀を含めて考察を試みる。[23]

3、ロシア（露西亜）

ロマノフ朝ロシア帝国の南下政策は、十八世紀前半に「西」で始まっていた。オスマン帝国の支配下にある黒海・バルカン半島、とりわけ黒海への出入口であるコンスタンティノーブル（現・イスタンブール）の確保をめざし、ピョートル大帝が開始した帝政ロシアの南下政策は、十八世紀後半におけるエカチェリーナ女帝によるクリミア半島占領を介し、十九世紀を通じて継続されることになる。十九世紀には中東を間に挟んでイギリス・フランスと対立を深めたロシアは、ギリシア独立戦争やエジプト＝トルコ戦争への介入を繰り返し、クリミア戦争（一八五三～五六）でオスマン帝国の側についた英・仏と衝突して敗れた。この敗北によってロシアはいったん「西」から退却し、中央アジアおよび東アジアへの進出を強化する。つまりバルカン半島でのロシアの敗北が、日本の幕末、そして明治維新を引き寄せたと言うことさえできる。そもそも東アジアでは、一六八九年のネルチンスク条約によってロシアと中国（清）との間に国境調停が保たれていた。しかしクリミア戦争での敗退は、東アジアにおけるロシアの活動をにわかに活発化させた。戦後二年目（一八五八）に東シベリア総督ムラヴィヨフは中国（清）との間にアイグン条約を結び（結ばせ）、さらにその二年後には北京条約によって中国本土への領土拡張を実現した。一八五八年は安政五年、日本はアメリカとの間に日米修好通商条約を結んでいる。あと十年で明治維新を迎える頃であった。

これらにもとづき、ロシアは日本海（東海）への進出を本格化させる。そして北京条約締結と相前後してウラジヴォストーク（ウラジオストック）で港湾建設を開始した。ネルチンスク条約締結以降の過程を通じて、特にクリミアでの敗戦を契機にロシアは日本海（東海）やオホーツク海への監視を強め、シベリアからサハリン（樺太）・イェゾ（蝦夷）、またその一方でシベリアからカムチャツカ半島・クリル諸島（千島列島）の海域で、しばしば日本人と遭遇することになる。そのような過程で起きたのが、ラクスマンによる来航一件である。十八世紀も終盤に近づいた寛政四年（一七九二）、ロシア皇帝・エカチェリーナ2世の選任を得たラクスマン一行の艦隊が、漂流民・大黒屋光太夫らを伴って根室に寄港した。この一件が、日本におけるロシアとの接触の濫觴とされる。ただし、これには前段階があった。安永七年（一七七八）といえば田沼時代のさなか、クリル諸島（千島列島）のウルップ島を拠点にラッコ猟を生業としていたオチエレデン一行が根室のノッカマップ

六

岬に上陸した。三隻の船というから住民には相当のインパクトがあっただろう。彼らクリルのロシア人は恒常的に食料不足に悩まされており、そのため日本との交易を望んでいたのだという。しかし、松前藩の役人は鎖国（海禁）を理由に交易を断った。ただしこれ以前から、規模の大小は問わず同様の接触はあったものと考えられ、この後もロシア人による蝦夷地への上陸や住民との接触は繰り返されていたと考えられる。そのことを証するように、江戸幕府（田沼政権）は、ラクスマン来航の七年前に当たる天明五年（一七八五）、青島俊蔵ら五名を検分隊として蝦夷地に向かわせていた[24]。彼らは情報収集に努めているが、なかでも最上徳内は計八回の蝦夷地調査に携わり、のちに間宮林蔵とともに北方探検の代名詞となった。そのような状況の中でラクスマンの一件があり、シベリア総督ピールの書簡には日本との交易によって生活物資を確保したい旨が記されていた。しかし幕府はラクスマン一行の江戸来航を断り、代わりに長崎入港の許可を与えた。ところがラクスマンは長崎には向かわずに帰国し、彼の報告を受けたエカチェリーナはウルップ島に開拓民を送って拠点開発を開始したのである。

天明七年（一七八七）老中首座に着任した松平定信は幕府の財政再建をめざして改革に着手するが、田沼意次によって進められた蝦夷地開発を中断し、従前のように松前藩の局地統制にとどめる意向を示した。しかし、ロシア南下の進行はそれを許さなかった。ロシア船をはじめとする唐突な異国船の出現に、寛政三年（一七九一）には長崎に砲術稽古場を、江戸郊外に大筒稽古場を設け、軍学者・福島国雄に軍役令の提出を命じている。そのような際のラクスマン来航はインパクトが強く、幕府と情報を共有する各藩に大きな動揺を惹き起こした。定信は寛政五年、ラクスマン来航の翌年に老中の座を退き白河藩政に精力を傾注したが、ロシアの進出に警戒感を呼び覚まされた幕府は、ラクスマン来航の七年後、寛政十一年（一七九九）に蝦夷地の直接統治に乗り出すまでに実地調査を重ねていった。

下北半島と函館を除いて、ラクスマン一行が日本人の前に姿を現わすことはなく、もし彼らが定信の指示に従って長崎へ回航していたとしても、出島のオランダ人と大差ない扱いを受けたことだろう。しかし、大黒屋光太夫と磯吉への人びとの好奇心をうかがうにつけ[25]、もしラクスマンが希望通りに江戸への寄港を許されていたのであれば、彼らは嘉永六年（一八五三）に日本全国に旋風を巻き起こしたペリーの艦隊に六十年先んじて、大きな波紋を惹き起こしていた可能性も考えられる。しかし、おそらくそこまでの騒動にはならなかっただろう。日本人は、まだ異国に対して、それほどの関心と警戒心を抱いていなかった。

平賀源内は田沼意次の時代を生きた。田沼の庇護下にあったとする説も依然根強い。意次の妾や息子にエレキテル実験を見せたことや、意次の後援を書簡で暗示していることなど何らかの接点はあったと思われるが、一部で言われてきたように意次が源内のパトロンであったり、逆に源内が意次のブレインであるような関係は史料的には認められない。明和七年（一七七〇）の二度目の長崎遊学に際し、金策に追われる

源内に対して、意次の盟友であった千賀道隆が手を差し伸べ、留守の間に荷物を預かるなど、意次の周辺との接点はあるが、源内と意次が直接的な接点を持った事実は確認できない。そして、田沼が老中となり実質的に田沼時代が幕を開ける明和九年（安永元年、一七七二）の前年には、高松藩主・松平頼恭（よりたか）の死去によって源内の「御構（おかまい）」（構われた藩や幕府、源内の場合は高松藩以外の藩や幕府への仕官を禁じる）[26]が生涯解けないことが確定している。源内は、天明六年（一七八六）の田沼時代の終焉を見ることなく一七八〇年に没した。それでも源内を取り上げた実録体小説（虚実冥合した歴史小説）には、蝦夷地を介して源内とロシアとの関わりに触れるものがある[27]。ロシアへの警戒心に囚われた時代には、海外事情に詳しいとされていた源内に、ロシアとの交渉を夢想的に仮託する者も現われたのである。

その後、帝政ロシアは一八八一年（明治十四年）にシベリア鉄道の建設に着手した。そしてそれから十三年後、日清戦争後の一八九四年に三国干渉を主導して遼東半島を放棄させ、帝国日本の明白な「目の上の瘤」となる。ロシアが声をかけたイギリス・フランス・ドイツの内、思惑に乗ったのはフランスとドイツの二国であった。イギリスはグレート・ゲームと呼ばれる中央アジアでの覇権争いを一八一〇年代以来ロシアと続けていたこともあり、アメリカ合衆国とともに中立に回った。香港・上海など沿海部から中国利権を浸食していたイギリスが、シベリア鉄道に象徴されるように内陸部から中国を蚕食しようとしていたロシアを警戒するのも当然であり、日清戦争も日露戦争も、ある意味でイギリスとロシアのグレート・ゲームの一環ですらあった。ちなみにシベリア鉄道が全線開通したのは一九一六（大正五）年、前年に始められた第一次世界大戦がヨーロッパ各地で猖獗を極めている時期であった。

以上、平賀源内を取り上げて日本人の異国認識を論ずる本稿でロシアの動向を記したのは、現在時（二〇二二年三月）において世界中からロシアが注目されているからではない。日本人が日本を見直す契機、あるいは少なくとも意識を傾注することにロシアの動向が大きくかかわっていたからである。ただ、当時の日本人の多くは日本が島国であるかどうかすら知らなかった。むしろ、そのような疑問を抱く機会がなかったといえる。日本が島国であるかどうか、言いかえればロシアをはじめとするユーラシア大陸と地続きであるのかどうかを幕府が知ろうと躍起になったのは、ロシアの南下がにわかにクローズアップされた十八世紀後半に至ってからである。幕府に派遣された間宮林蔵が、樺太（サハリン）に至って間宮海峡を「発見」し[28]、その報を幕府中枢にもたらしたとき、はじめて日本は大陸と陸続きではないという確証が一部の日本人の間に生まれた。しかしそれは当時の人口（約三千万人）の極めて限られた人々にのみ共有された知識であった。残る大多数の人々にとって、日本列島が大陸から独立した島国であるという知識（情報）は、江戸幕府が存続する限り知り得ない情報であった。

ちなみに、日本が島国であるという認識が大多数の日本人に共有されたのは、明治期に学制が制定され、児童が教科書を用いる時代になっ

てからである。それは他の多くの知識や情報とともに学校に通う若年層から家庭を介して中高年へという形で普及して行った。[29] もっとも、それには半信半疑の層も多かったという。学校は、他では知り得ぬ斬新な知識を提供する場としてあることで、また教師はその人的契機であり媒介者であることによって、大多数の地域住民の尊崇を受けることができたのである。[30]

4、朝鮮と中国（清）

十八世紀後半から十九世紀にかけての時代とは、日本人にとって異国と異国人が見世物から別のものへと変容していった時期に当たる。ロシア人は、そのすべての過程において見世物にはならなかった。貿易の交渉相手であり、脅威であっても見世物ではなかった。このようにして現われた異国人が幕府の過剰な警戒を生み出し、日本人の異国への意識を変えて行ったと言えば単純化が過ぎるが、この経緯がいわば暢気な見世物視を崩す要素、それも非常に大きな要素となったことは疑えない。

日本が鎖国政策を敷いた江戸時代、長崎だけが外に向かって開かれた「窓」（対外貿易の拠点。「口（くち）」と呼ばれることが多かった）であったという認識は急速に旧弊化している。二〇二二年現在の学校教科書の多くは、蝦夷地に向かって開かれた「窓」である松前、朝鮮への「窓」である対馬、中国とオランダへの「窓」である長崎、琉球（さらには中国）への「窓」である薩摩という「四つの窓（口）」があったという認識（記述）に、ほぼ落ち着いている。[31] ただし、それらの「窓」が近世（鎖国以来）を通じて同様な形と大きさをそなえて存在したわけではなく、それぞれに特有の状況があり、それは刻々と変化した。中には荒俣宏氏のように、長崎だけに「窓」があり、あとはどこも開け放たれていたと言う論者さえいる。[32] 確かに、近年明らかになりつつある非公式貿易、当時の言葉で「抜け荷」（密輸・密貿易）を考慮に入れるならば、それに近い状況もあり得たが、そこまで広範に密貿易が横行するようになったのは江戸時代の中でも短い期間に過ぎず、そして結局それほどに大規模なものではなかった。天保期（一八三五年、四〇年）の抜け荷事件が事件として広く取り沙汰されたように、それは決して一般人の視野に頻繁に入るものではなく、貿易高の数値に劇的な変更を迫るほどでもなかったはずである。[33]

蝦夷の背後にロシアがいることに日本人（幕府）が気づいたのは、先にも述べた通り、ほぼ十八世紀の後半に至ってからである。しかし朝鮮に対する宗氏や琉球に対する島津氏のように、ロシアと日本との間を取り持つ者はいなかった。蝦夷に対する「窓」として、松前藩という

藩名はついていても、それは幕府の商業的出先機関に近く、経営と呼べるほどに蝦夷地の広範囲・多領域を統括するようになったのは、周知の通り明治に開拓団が入って（そこが北海道となって）以降のことである。そもそも松前藩の視線の先にいたのはアイヌであってロシアではなかった。北前船の整備によって西回り・東回り航路が発展してからは、蝦夷地は海産物の重要な供給地であり続けたが、アイヌ民族と日本本土との文化交流はあまりにも希薄だった。対馬（宗氏）は幕初以来、一貫して朝鮮との間を取り持ったものの、[34] 日本と朝鮮の関係は、あくまでも中国（明・清）の周辺国同士という関係であって、両国が貿易国同士であったわけではない。そのことは、互いに中国（明・清）の冊封国同士であった朝鮮と琉球の関わりの（その距離と反しての）深さを対照すれば、より明瞭である。対馬には朝鮮文化が色濃く残るが、それらは日本列島に流れ込まなかった（あるいは隠然と流れ込んだ）という特色をもつ。[35] 朝鮮通信使いわゆる「朝鮮行列」は開幕直後の慶長十二年（一六〇七）から近世後期の文化八年（一八一一）まで続き、幕末を待たずに終わっている。毎回の人数は三〇〇名から五〇〇名であったという。しかし、蝦夷（アイヌ）との間には、このような交流すら存在しなかった。明治期に至ってからも明治政府のアイヌ民族への対応はもっぱら同化政策と隔離行政に分裂的に傾注され、アイヌ文化の継承に必須のアイヌ語は一時消滅寸前にまで陥った。[36] 北海道と名を変えた蝦夷地は開拓団の入植によって肥沃な新開地へと変容するが、アイヌへの日本人の視線が「好奇」以上に至らなかったことは、当時発行された絵葉書や観光パンフレット、巷説を書き留めたガイドブックや絵本の類に如実に反映している。

右に蝦夷・朝鮮・琉球を包括的に述べたが、朝鮮と琉球との関わりということでは、十七世紀に成立した『洪吉童（ホン・ギルドン）伝』が注目される。[37]『朝鮮王朝実録』燕山君六年（一五〇〇）に記録された洪吉童（同）をモデルにして語られていた義賊伝説を、文人の許筠（ホ・ギュン）がまとめた実録体小説であるが、その洪吉童が朝鮮王朝の追っ手をのがれて琉球王国に渡り、琉球王朝の圧政に反逆する先島（八重山諸島）に本拠を置いたオヤケアカハチの乱に参加するホンガワラ（洪家王）になったという伝承を派生させた。それは『洪吉童伝』に部下とともに新天地を求めて海を渡ったギルドンが、栗島（ユルド）国に漂着し、島の王族を征服して身分のない理想郷を作り上げたという結末が描かれているからであろう。栗島に着く前に、猪島（ヂョド）で怪物を退治し、二人の妻（鄭氏と白氏）を得るという形でも語られたという。渡海伝説ということであれば、日本では源為朝が最もよく知られている。『保元物語』によれば、為朝は伊豆大島流刑から十年後の永万元年（一一六五）に鬼の子孫が暮らす鬼ヶ島を平定し、そこを蘆島（あしじま）と名づけた。連れ帰った大男（鬼）を手下として伊豆七島を支配したという。このような「伊豆大島を出て周辺の島々を支配した」という『保元物語』のプロットが、琉球への渡海という物語を生ましめたのであろう。『風流志道軒伝』に、当時としては異例の渡海譚を描いた平賀源内の場合、本草学の師匠である田村藍水が薩摩藩主・島津重豪（しげひで）とのかかわり

から琉球への造詣が深く、門人筆頭の蘭学者・森島中良が『琉球談（ばなし）』（一七九〇年刊）を著すほど琉球への深い関心を有していたのに対して、[38]琉球への言及を見ない。それは『風流志道軒伝』においても同様だった。源内の場合は、先ほどロシアとのかかわりで述べた蝦夷地への関心が高かった。そこには源内が薬物採取の対象地域を師匠の藍水のフィールドを避けて求めたように、単なる関心以外のファクトが作用していたとも考えられるが、田沼の蝦夷への関心がおそらく最大の理由であっただろう。[39]

源内は、当初は朝鮮人参を通じて朝鮮国への関心を深めた形跡がある。『物類品隲』に寄せた藍水の嫡子・西湖の「朝鮮種人参試効説」には、携帯した朝鮮人参で少年の命を救う源内の姿が描かれている。安永年間に入ってからの小本型談義本『放屁（へっぴり）論』の冒頭には「人参呑で縊（クビク）る癡漢（タハケ）あれば」と記されるが、源内は「死」の対極にあって「生」を賦活させるモノ（薬）が人参（朝鮮人参）であると晩年まで認識していた。[40]このように「朝鮮」とは源内にとって第一義的に「人参」の原産地であって、しかし結局それ以上のものではなかった。蝦夷に対する松前氏の関与とは対蹠的に、朝鮮に対する宗氏の関わりには文化面が大きく深くかかわっていて、現在もなお対馬では衣食住のすべてにおいて（特に「住」の面で色濃く）朝鮮文化の強い影響を見ることができる。源内が長崎遊学の途次、朝鮮文化の影響が残る鞆の浦で産業指導をおこない、生祠が残る（生き仏として祀られている）ことは広く知られているが、彼が朝鮮文化に関心を持った形跡は稀薄である。

一方で、中国はどうであっただろう。一三六八年、日本では足利義満が室町幕府三代将軍に着任した年に朱元璋が打ち立てた漢民族による明王朝は、一六四四年に李自成の乱で瓦解した。李自成は順の建国を宣言するが、その前年にモンゴルでは順治帝が即位し、清を建国していた。清はわずか一か月余りで北京から李自成を追い出し、満洲族の清が中国を支配する。源内が『風流志道軒伝』を書いた宝暦十三年（一七六三）は、高宗（乾隆帝）二十八年、清の支配が始まって百二十年目である。康熙・雍正・乾隆と続く、清代の最も興隆した時期に当たる。文化面でも康熙帝の康熙字典、雍正帝の古今図書集成、乾隆帝の四庫全書に象徴される文化事業が特筆されるが、学術の面からみれば次の嘉慶時代が近世後期の化政文化にも似た考証文化の隆盛を演出した。[41]一七三五年に始まった乾隆治世は六十一年後の一七九六年まで続くのであり、これは日本では田沼時代も過ぎ、寛政改革も頓挫して三年後の寛政八年に相当する。『風流志道軒伝』に「清朝の主（あるじ）・乾隆帝の住み給ふ北京（ほっきん）になん至りけるに、広きこと類（たぐひ）なく、繁華詞（ことば）にも及ぶべからず」と描かれる中国の宮廷と皇帝の姿には、戯画的であるものの、繁華な装飾といい、外征への姿勢といい、宮廷内での贅沢な生活といい、当時の日本における乾隆帝の詳細な情報が反映している。

この談義本を書く十年前の源内の第一回長崎遊学の内実は、いまだにほとんど何もわからない状態であるが、その折に長崎の唐人屋敷で清朝の情報を仕入れることは可能であったし、近世日本の宗学を支えた林家の私塾（湯島聖堂）に三年前後起居した源内の耳に中国の情報が入っ

てこないことのほうが不自然である。長崎におけるオランダ文化が、ほぼ完全に出島に封じ込められたのとは異なり[42]、長崎には唐人屋敷・唐人町と呼ばれるチャイナタウンが形成され、明商・清商の出身地に応じて唐寺が建てられ、中国文化が現在に至るまで色濃く残存している。華人は世界中にチャイナタウンを作り続けてきたわけであるが、貿易商に特化された唐人屋敷は、ある意味異色な入植例であった[43]。とはいえ祭りや年中行事あるいは食など、地域住民の目に触れ五感に訴える祭事や行事を中心に、現在もなお長崎には中国文化が浸透している。

ここで中国・朝鮮のみならず、蝦夷や琉球について触れたのは、ほかでもない。平賀源内の同時代人たちの関心対象として、それらは時に中国や朝鮮と混同され、明瞭に区別されぬまま意識された国々であったからである。そして、それは十八世紀後半における江戸の文人（文化人・知識人）たちにとって、さらには一般民衆にとっても、ある程度共通する現象であった。

5、深井浅之進の冒険

中国・香港合作映画『女帝（エンペラー）』[44]の終盤、皇帝とその甥、その息子と娘が次々に死んで、最後に残った皇后が甥を思って朱色の布を胸に抱いているところに、どこからともなく一本の剣が飛んできて背中から胸を貫く。この血なまぐさい一連の惨劇は皇后が皇帝を殺すために毒盃を用意した時から始まり、ドミノ式に人が人を殺してゆくというストーリーを描く。皇后の胸を深々と貫いた剣は、その後、意思を持った生物のように色とりどりの鯉が泳ぐ石造りの水槽の中へと自ら飛び込む。一瞬、水面を覆った水草が割れて静かに元に戻ってゆくという画面にエンドロールが重なるのであるが、それはあたかも源内の最高傑作と称される浄瑠璃『神霊矢口渡』のクライマックス（四段目切、渡し場の場面）で、どこからともなく飛んできた二本の矢が生き残った極悪人、頓兵衛と六蔵の喉を射抜く場面を思い起こさせる。

「あら不思議や。何国（いづく）より共白羽（とも）の矢。二人が吭（のどぶえ）射ぬかれて。其（そのまゝ）息は絶果（たえは）てたり。」

中村幸彦氏の手になる『風来山人集』[45]の頭注によって誰もが驚いた平賀源内の古典文学に対する知識の集積は、膨大な知の体系が、この本草学者の内に築かれていたことを世に知らしめた。その自在な空想力と科学的な裏付けによって、源内の物語は近代のＳＦ小説に同時代のどのテキストよりも近づいている。その典型として掲げることのできる作品は、戯作者としての風来山人の名を不動のものとした最初の談義本（長編戯作）二作のうち、異国遍歴が描かれた『風流志道軒（しどうけん）伝』（一七六三年刊）である。

この物語で仙人から万能の羽扇[46]を与えられた深井浅之進[47]は、「是より日本はいふに及ばず、唐・天竺より諸の外国までを、廻り見ん」と思い立ち、世の中を深く知るという名目で遊里を中心に、先ず日本の津々浦々を旅して回る。外題（タイトル）に「風流」が冠せられるゆえんであるが、彼はそのまま日本を飛び出し、大人国・小人国、長脚国・長脛国、穿胸国から「蝦夷・琉球はいふに及ばず」、当時の世界地図に載る九ヶ国を経て「天竺・阿蘭陀」に至る。さらには戯作らしく遊び人の国（うてんつ国）、愚医（藪医）国、四角四面なる（融通の利かない）ぶざ国（しんござ国）、いかさま国といった架空の国々（ただし当時の世相を映す）を経て、「かく様々の苦労艱難、世界中の国々嶋々、残る所なく廻りければ、羽扇の妙ありとはいへども、元気も足も労れければ、朝鮮に至りて、人参のぞうすいを喰ふ事二月ばかり」と、朝鮮国で二か月の休息をする。しかし、ここに朝鮮国の描写は一切ない。先に、源内における朝鮮国は、あくまでも「人参」を介してのみの関心の対象であったと記した通りである。しかし、それでもまだ世界遍歴の疲れは回復しなかった。そこで、おそらく『荘子』の「養生」をふまえて浅之進は「又足を休めんに、くつきやう（究竟）のことありとて、夜国に寝ること半年余にして、草臥も直りければ」と、夜しかないと考えられていた「夜国」でさらに半年間の睡眠をとって、やっと「くたびれも直」るのである。「夜国」とは、北極圏の白夜の情報から派生した架空の国であった。

元気回復した浅之進は、物語の終盤に「唐土」へと旅立つ。時代は清朝の乾隆帝代。中村氏の頭注にも（『風流志道軒伝』が刊行された）「宝暦十三年は乾隆二十八年に当たる」と記されるように源内の同時代であった。日本古典文学大系『風来山人集』で、最初の日本国巡りは約七頁、大人国・小人国が三頁弱、手長足長国が三頁、穿胸国が二頁という分量であるのに対して、唐（清朝）は単独で六頁を費して書かれる。そのあとに、さらに唐の泰山と競わせるための富士山張り抜き計画の描写が二頁分加わるので、唐の描写は日本全国に匹敵し、むしろ凌駕する分量に達する[48]。そして同程度の長さで女人国が描かれて浅之進の旅は終わりを告げる。この戯作小説が書かれたのは『月花余情』（一七四六年刊）が会話描写を導入して十七年、会話体洒落本の嚆矢とされる『遊子方言』（一七七〇年刊）の七年前であった。源内の戯作は洒落本にも大きな影響を与えているのだが[49]、当時の読者に向けて多くの頁にわたって描かれる「女人国」は、百万都市江戸の人口の八割（町人人口の六割）が男性で占められる当時の社会状況を反転的に穿った（滑稽化した）ものである[50]。

宝暦十三年（一七六三）には、『風流志道軒伝』に先立つこと四か月、七月に『物類品隲』が刊行されている。彼の関心が最も強く向かっているのは、本来は人参（朝鮮人参）であった。確かに、「元気も足も労れければ、朝鮮に至りて、人参のぞうすいを喰ふ事二月ばかり」と朝鮮人参は描かれるのだが、その扱いはあまりにわずかである。二か月というのは浅之進の旅の中では長い期間であるが、その間のことは何

も描かれず、次に登場する夜国では二か月の三倍以上の「半年余」が費される。つまり朝鮮国は夜国と並ぶ休息地の役割を果たすのみである。一方で、この頃から源内の関心は「到達できる異国」である蝦夷へと向かう。彼自身は、結局蝦夷の地を踏むことはなかったが、盟友の平秩東作は民間人として初めて蝦夷地で越冬を経験している[31]。また、源内没後に書かれた際物（モデル小説）や実録体小説には、蝦夷との関わりが虚実取り混ぜて描かれている（『織出蝦夷錦』『平賀実記』『金唐革』など）。当時の人々が源内と蝦夷地を結びつけてイメージする下地が、源内の一連の事蹟の中に、すでに築かれていたのである。

「唐の風俗は日本と違ふて、天子が渡り者（風来坊）も同然にて、気に入らねば取り替へて（中略）不埒千万なる国ゆゑ、聖人出て教へ給ふ。日本は自然に仁義を守る国故、聖人出ずしても太平をなす」。これに続く「唐は文化にとらかされて、国を韃靼にせしめられ」という認識は、やはりこの頃流布した「文弱」という言葉を思い起こさせる。源内は、では何が必要であったかを書いていないが、それは「武力」ではなく、「富士山張り抜き計画」という大掛かりなファルス（笑劇）に託して文化競争を描くところにあり、そこにこの人の底知れなさがあった。すなわち、『風流志道軒伝』は、ある意味で思想小説なのであり、なぜこの時点（宝暦十三年、一七六三）でそのような小説が書かれなければならなかったかを考察する必要がある。それは断じて「仕官御構」のゆえではない。そうではなく、源内に思想（思考）実験を試みる内的な必然性があったのである[32]。

6、思想と文学をめぐる状況

近世の文学（江戸文芸）において、このように日本と中国を取り上げてダイレクトに対決を試みさせる描写は決して多くはない。むしろ、明らかに少ない。それは、たとえば神儒仏（または道）の討論という形をとって宗教論争の形で描かれるか、あるいは、さらに学問や社会の優劣を論じる際にとられる形であった[33]。本草学という中国由来の学問（神農を始祖とする）が源内の終生変わらぬ学問的土台であったが、彼が江戸で本草学の師匠である田村藍水に入門したのは、大学頭・林信言に入門して湯島聖堂に住む前後であり、むしろ林家への入門が先行した可能性もある。そのうえで、源内は賀茂真淵に入門して国学を修めている。入門という形式から見るのであれば、当時行なわれていた学問の体系において、源内にとって最も近い学問が儒学、縁遠い学問が蘭学であったとすら言えるのである。

源内は、身も心も漢（唐・中国）に捧げるほどの極端な傾倒を示した荻生徂徠を毛嫌いし、徂徠の一統を嘲弄している。それに対し、儒学の大家でありながら「和」に軸足を置いた伊藤仁斎を心の師として崇めている。[54] 源内の国学者への入門については、まだ不明確な部分も多く残っているが、それは名物学（和漢の書籍に載る「物の名」を同定する）のためだけになされたものではなかった。第五回薬品会、いわゆる壬午大物産会に向けて書かれた「東都薬品会趣意書」に高々と謳った文章を見れば、それはどの学問の系統よりも当時の国学の言葉に近かった。一七八〇年の初頭（旧暦安永八年十二月十八日）に源内が亡くなった頃から、江戸に住む人々の間に新しいもの、価値があるものを称して「こいつは日本」と呼ぶ流行語がはやるのであるが、それは、かつて上方（京都・大坂文化圏）に文化の中心があった頃、江戸にすら流行が行き渡らないものを「くだらない」と言ってさげすんだのとはまさに対照的な社会現象であった。政治のみならず、経済も、文化も、江戸が日本の中心となったことを体感的に実感した十八世紀の江戸の人々が、「ここが世界の中心だ」という中華意識をあらわにした通言（流行語）が、「こいつは日本」であったと私は理解している。[55] このようにして日本に中華意識が目覚め、江戸を中心に浸透してゆくのである。

当時の代表的芸能である浄瑠璃（文楽）は、当然のように上方の言葉で上演されていたが、そこに初めて江戸の言葉を持ち込んだのが源内（福内鬼外）であった。[56] 芝居仕立てが受けて三千部売れ、後編まで出版された『根南志具佐』と比べて『風流志道軒伝』がどれだけ読まれたかは明確ではない。しかし、『異国奇談　和荘兵衛』（安永三、一七七四年）以降の「異国もの」戯作の呼び水となったことは間違いない。[57] それらは歌舞伎や浄瑠璃の一節のように語られたであろうし、たとえば『根南志具佐』巻四の両国風景のような「さわり」だけでも耳にした者まで含めるならば、これら戯作の内容は、百万都市江戸のおそらく三～四人に一人程度の耳には届いたのではないかと思われる。[58] そして、そのクライマックスの末尾には、上方を代表する京都四条河原の夕涼みは、江戸両国の夕涼みが引き連れた新入りの召使ほどのものでしかないという有名な江戸褒めが置かれている。「こいつは日本」にせよ、「江戸っ子」にせよ、そのような江戸町人の自信を励起するのに、源内の戯作は少なからぬ役割を担った。[59] 一七八〇年代における江戸は日本の中心であることを超えて、それよりもさらに広い範囲での中華意識すら手に入れて行った。ただし、ちょうどその頃から本稿にも述べたロシアの南下が始まり、日本は「異国」の脅威に直面してゆく。その脅威が現実のものとして社会を揺り動かし始めるペリー来航、「たった四杯で夜も寝られ」ぬ蒸気船ショックは、一八五三年（嘉永六年）のことであり、源内の死去（一七八〇年）から数えれば、すでに七十三年が経過していた。

源内は『風流志道軒伝』で日本と中国との優劣を論じようとしたわけではない。両者には（人間には）、実は大差はないのだということを一元的に言いたかったのである。それは彼が繰り返し記した「唐も、大和も、昔も、今も」（変わることはない）というフレーズに反映して

いる源内の基本的なスタンスであった。ただし、そのスタンスも微妙に変化する。源内は「腐儒者」「屁っぴり儒者」への批判を展開したあとに、「唐は唐、日本は日本、昔は昔、今は今なり」と記す。「三代といへども礼楽は同じからず、立て拱するが礼なりとて、今貴人の前で立れもせず、聖人の政なりとて、井田の法を行ば、百姓どもには安本丹の親玉にせられなん」と続くのは、過去と現在を混同し、すべて聖人の世に従うべしとする徂徠の古文辞学への大きな反発と社会批判が込められている。そしてその後に源内は、風来仙人の言葉に仮託しつつ「裏店の淵に身をひそめ、鰻鱺・泥鰌と同じ様に、ぬらりくらりと世を渡つゝ、つら〳〵世上を窺ふに」と、語り手として自らの境遇に開き直り風来仙人の姿に身をやつして物語中に登場する。のちに鉱山開発で「大しくじり」（「鉱山記録」[60]）をした後、長崎への遊学にかこつけて江戸を逃れ、三年後に帰還してからの源内は、自らへの「御構」の処断を裁可した高松藩主・松平頼恭の死去によって他藩への仕官が永久にかなわなくなると、小本型の戯作（談義本）で世の中に対する激しい批判を始めるのである。宝暦から明和にかけて、言い換えれば「御構」の処断が覆される可能性のあった頃とは異なり、そこには以前のように登場人物に仮託して批判を喋らせるようなワンクッションすらなく、ただ地声を張り上げることが多くなった。逆に言えば、そこでは本音が多く語られるようになったと考えられるが、その結果そこに描かれるのは日常生活の範囲であり、本稿で見てきたような「外」、日本以外のどのような「異国」も舞台として選ばれることはなかった。[61]

ただ、宝暦期と安永期という二つの時代にはさまれた明和五年（一七六八）序の『痿陰隠逸伝』、同六年刊の『根無草後編』、そして明和七年のことを記した『天狗觸髏鑑定縁起』（成立は安永五年、一七八六）には中間的な要素が含まれている。従来、『風来六部集』に収められたこれらは、安永期の『放屁論』（三年刊）、『里のをだ巻評』（同刊）、『放屁論後編』（同六年刊）、『飛だ噂の評』（同七年刊）などと同列に論じられることが多かったが、従来言われてきたような宝暦十一年（一七六一）の致仕許可の時点ではなく、明和八年七月の頼恭死去をメルクマールとする「御構」以前・以後で考える必要がある。それは、源内が国益思想を中心に物事を考え、決定していた時期と、すでにその余裕が失われ、自らの経済状況を中心に考えざるを得なかった時期との差異とも言うことができる。「国益」を考えるためには「異国」を考えることが不可欠になる。『風流志道軒伝』などの半紙本型（長編）戯作を、安永期の小本型（短編）戯作と同列に俎上に上げ、論じてきた従来の解釈では、源内における「文学をめぐる状況」を正確に捉えることはできない。物語的な結構（構造）は、その後、明和七年から携わるようになった浄瑠璃脚本へと移行する。もちろん明和・安永期の源内の戯作（小本型談義本）にも定型はあったが、それらは物語的な結構とは全く別のものであった。これらはいわゆる「談義」に発する談義本（半紙本型談義本）とは成り立ちを異にしているため、かつて「講話本」と呼んで区別したことがあったが、[62]議論を喚起すること（テーマ）や啓蒙や教訓に発していること（モチーフ）は共通するため、改めて「小

本型談義本」と呼んで区別した。[63] 近世とりわけ江戸で出版文化が発展した近世中・後期のジャンル意識が、本の形態と密接に関連していることは、近年の研究者たちがこぞって明らかにしてきたことである。[64]

以上のように、戯作であり娯楽小説の形をとるとはいえ、源内の文章には海外認識の片鱗が反映している。しかし、フィクションをそのまま受け入れるわけにはいかず、ここから先は源内の創作における虚構の構造が十分に解き明かされてからの議論になるだろう。

7、おわりに ― 今後の課題

本年（二〇二二年）四月より「歴史総合」が高校の必修科目となった。世界史・日本史を問わず十八世紀以降（近現代）の歴史を学ぶことが「当たり前」の時代になったといえる。[65] 日本史が世界史と無縁に存在するものではない以上、むしろ当然のことであろう。ただし、十八世紀以降に限定することの是非は、時間数の制約などの条件があるとはいえ、今後も引き続き検討されるべきである。

本稿は、近世文学における「異国」からの影響、とりわけ平賀源内においてはしばしば異国の人物や文化が取り上げられるという認識に由来する。確かに、『風流志道軒伝』における中国と朝鮮、とりわけ前者の扱いは、一見あたかも江戸戯作のひとつの趣向として（表層的に）取り上げられた「異国の人物や文化」であった。江戸戯作の象徴とされる黄表紙を創始した朋誠堂喜三二と恋川春町が両者揃って源内との交友を持った時期に黄表紙は生まれた。[66] 赤本・黒本の時代から、のちの合巻、さらには明治期に至るまで草双紙の時代は長く続くが、それが「大人のもの」（『稗史億説年代記』）となったのは、喜三二・春町によってであるとされる。しかし、それを導いた平賀源内の事蹟に照らしてみるならば、異国は明らかにひとつの「価値」としてあった。端的に言って、同じ薬材（薬品の原料）であっても、それが日本国内のどこから取って来られたものであるか、それとも「異国」から海を越えて持ってきたものであるかによって、その取引価格は天と地ほどにも変わってくる。源内は、そのような価値を相対化すること（いったん留保して価値の基準を産地ではなく品質へと改めること）を推し進めることで、従来とはまた別の価値を確立しようと試みた。言い換えれば「新たな価値を生み出す」ことの『価値』を創出しようとしたのである。そのような人物の書いた小説には、いかに戯作と呼ばれる娯楽小説であったとしても、そのような認識が反映しないはずがない。その詳細は「文学」の問題となるので本稿では省略せざるを得なかったが、当時の社会状況とも密接にかかわるものであろう。本稿が十八世紀の日本の社会状況

について、どれほどの視点を示し得たか、それは読者の判断に委ねる以外にないが、十八世紀を中心とする海外認識の一端なりともは示し得たものと思う。(67)

【謝辞】

本稿は、中国復旦大学日本研究センター第十六回国際シンポジウム「東アジア文化の継承と捨象—東アジア共同体の文化基盤形成に関する討論」における研究報告「平賀源内のアジア理解—中国・朝鮮を中心に—」（二〇〇六年九月九日）にもとづく。爾来かなりの年月を経てしまったが、当日意見をいただいた各氏、特に有益な意見を呈された劉 建輝氏（国際日本文化研究センター）に感謝致します。また、レジュメの中国語訳などに対して様々なご助言をいただいた孫 飛舟先生に御礼申し上げます。

注

（1）安永八年を、機械的にイコール西暦一七七九年とすること、また、源内の死去が伝えられたのが年を越して安永九年であったことから出身地（現・香川県さぬき市志度（しど）。ただし、出生地は同高松市牟礼（むれ）である可能性が高い）では享年五十二歳説を採ることなどから、生年享保十三年（一七二八）説が流布しているが、正しくは享保十四年（一七二九）に生まれたと考えられる。岡村千曳「平賀源内と蘭学」（中村幸彦校注『風来山人集（日本古典文学大系）』岩波書店、一九六一年。月報）、拙著『平賀源内の文芸史的位置—戯作者としての評価・評判—』（北溟社、二〇〇〇年）二二七—二二九頁参照。

（2）西洋暦に関しては、谷岡一郎『世界を変えた暦の歴史（ＰＨＰ文庫）』（ＰＨＰ研究所、二〇一七年）に拠る。

（3）『三国通覧図説』は林子平が天明五年（一七八五）に著し、『海国兵談』とともに寛政改革時に発禁処分を受けるが、写本によって流布した。近年は竹島と尖閣諸島に関して取り上げられることが少なくないが、あくまでも個人の編著であることに注意する必要があるだろう。

（4）中世にあった「天竺（印度）・震旦（中国）・本邦（日本）」という括りは、近世に至るまでに無効化された。「震旦」（真旦・振旦）が近世中期前後に「支那」へと移行したことは、その一例である。揖斐高「鎖国と国際化（特集：江戸文学と異国情報）」『江戸文学』第32号（ぺりかん社、二〇〇五年）など参照。本稿で用いる「支那」は歴史に照らしての表記であり、差別的な意識は含まないことを付言する。

（5）拙稿「〈異文化〉をめぐる断想―なぜ、この国でそれは〈見世物〉であり続けているのか―」（大阪商業大学比較地域研究所紀要『地域と社会』3、二〇〇〇年）参照。

（6）近世（江戸時代・徳川時代）に対応するのは明王朝と清王朝であったが、明は江戸幕府が開かれて約五十年後に清に取って代わられる。ただし同じ頃に日本が鎖国政策を採ったこともあり、文化の面では長く漢民族の明王朝に発する文化が当時の「唐」（中国）のイメージを形づくったという一面があった。

（7）琉球使節による「江戸上り」（琉球行列）は、薩摩藩の意向で琉装ではなく中国風の衣装で行なわれた。なお、「カラ」という発音は「高麗」にもとづくとされる。

（8）ただし、それはあくまでも一般に向けた戯作小説のなかでということを注意しておく必要がある。なお、「異国」という言葉自体は、古くから、ただし「ことくに」と発音して用いられてきた。よく知られているように、『源氏物語』常夏巻には「広く異国の事を知らぬ女のためとなむ覚ゆる」と見える。しかしこれは「おのが国にはあらで、異国に田を作りけるが」（『宇治拾遺物語』）のように、他郷を「異国」と呼んでいた頃のことで、「自分の故郷」「自分がいる場所」ではないところを指す言葉として用いられた。その一方に外国（とつくに）という言葉があり、異国が「いこく」として主に日本以外の諸外国を指して用いられるようになるのは、異国船が日本近海に出没する十八世紀に至ってからである。

（9）ケンペルの『日本誌』を志筑忠雄が抄訳した『鎖国論』に至るまで、日本に鎖国という言葉や概念は存在しなかった。ただし、明国がそうであったように、日本が一六三〇年代に海禁政策を完成させたことは間違いない。外国との交通はすべて禁じられ、この禁を破る者は厳しく罰せられた。外国から帰国する者は死罪のはずであったが、実際には後述する大黒屋光太夫のように海外情報の取得に躍起となった幕府は彼ら漂流民を重用し、家や土地を与えるなどの便宜をはかった。しかし、彼ら帰国民には原則的に監視の目が光り、生活上の自由は制限された。

（10）いずれも正徳五年（一七一五）より。寛保二年（一七四二）からは、阿蘭陀船一隻、中国船十隻に縮小された。

（11）出島の人びとを、日本人の多くは「阿蘭陀人」と認識したが、たとえばケンペルやシーボルトがドイツ人であったように、オランダ人以外の出島滞在者もいないわけではなかった。特に医師として派遣された者の中にはオランダ以外の国籍を有する者が散見され、むしろ彼らこそが日本の歴史に名前を残している。「シーボルト」はオランダ語の発音で、ドイツ語では「ズィーボルト」。源内没後十六年目の一七九六年にドイツのヴェルツブルグで生まれた彼は、来日四年目（一八二六年）の江戸参府後に、いわゆる「シーボルト事件」によって国外追放されオランダに帰国したが、その後も日本研究を続け、一八三〇年代に『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』などを次々に著した。安政六年（一八五九）には国外追放を解かれて

六十三歳で再度来日し、たき、いね、鳴滝塾の門人たちとの再会を果たした。文久二年（一八六一）には幕府に招かれて江戸に行き、翌年帰国の後、一八六六年にミュンヘンで亡くなっている。日本では、二年後に明治維新を迎える年であった。栗原福也翻訳『シーボルトの日本報告（東洋文庫）』（平凡社、二〇〇九年）、板沢武雄『シーボルト（人物叢書・新装版）』（吉川弘文館、二〇二一年）など参照。

（12）古賀十二郎『新訂 丸山遊女と唐紅毛人』（長崎文献社、前編・後編、一九九五年）、唐沢むつみ「江戸時代における丸山遊女の実態とそのイメージ―阿蘭陀人・唐人との関わりを中心として―」（京都先端科学大学『人文学部学生論文集』第18号、二〇一九年）など参照。

（13）それまでの年一度から、寛政二年（一七九〇）以降は五年に一度と改められたが、参府回数の減少による情報や商取引の逓減を案じた出島側の意図的な「誤解」によって、四年に一度という頻度で推移した。

（14）注（5）の拙稿「〈異文化〉をめぐる断想―なぜ、この国でそれは〈見世物〉であり続けているのか―」参照。

（15）片桐一男『それでも江戸は鎖国だったのか―オランダ宿 日本橋長崎屋（歴史文化ライブラリー）』（吉川弘文館、二〇一九年）、青木國夫他編『紅毛談　蘭説弁惑（江戸科学古典叢書）』（常和出版、一九七九年）など参照。

（16）砂山長三郎「「岡田家の墓」と岡田東呉楼の金毘羅高灯篭顛末」（公益財団法人平賀源内先生顕彰会『文化サロン源内』24、二〇二二年）。

（17）平賀源内の事蹟については、主に城福勇『平賀源内（人物叢書）』（吉川弘文館、一九七一年）、芳賀徹『平賀源内（朝日評伝選）』（朝日出版社、一九八一年）に拠る。なお、拙著『平賀源内（ミネルヴァ日本評伝選）』を準備している。

（18）江戸蘭学者として逸早く長崎遊学を果たし、先鞭を付したのは前野良沢であったが、それでも明和七年（一七七〇）、四十八歳のことである。源内と交流のあった玄白や淳庵には長崎遊学の機会がなく、彼らの弟子である大槻玄沢が天明五年（一七八五）に遊学を果たした頃から恒例となった。

（19）日本人が南から北上してくるものに対してさほどの警戒心を抱かないのに対して、北から南下してくるものに警戒感を抱くのは、この頃から二〇〇年以上にわたって醸成された集団心理といえるが、二〇二二年現在もなお現実的な脅威が「北」にあると多くの日本人は意識している。

（20）中良は兄の桂川甫周の『魯西亜誌』（一七九三年）に結実する情報などをもとにロシア語語彙集『魯西亜寄語』（一七九五年、稿本）を編集し、オランダ語語彙集『類聚紅毛語訳』（一七九八年刊）は、のちに『蛮語箋』の名で広く流布して、後続の語彙集・単語集のプロトタイプとなった。注（1）の拙著『平賀源内の文芸史的位置』、石上校訂『森島中良集（叢書江戸文庫）』（国書刊行会、一九九四年）、拙著『万象亭森島中良の文事』（翰林書房、一九九五年）など。

（21）ただし「北夷」のみは「蝦夷」の背後に意識され続けた。現在も弁当店のメニューには「チキン南蛮弁当」があり、蕎麦屋では「鴨南蛮」（大阪では「鴨

なんば」）が供される。「南蛮貿易」の呼称もある通り、「南蛮」とは十六世紀を中心にポルトガル・スペインからの輸入品を呼ぶ呼称として広まった。「南蛮漬け」や「チキン南蛮」は唐辛子を用いた「南蛮酢」によって味付けをされていることに、また「鴨南蛮」はネギが「南蛮」と呼ばれていたことに由来すると伝わる（喜多村筠庭『喜遊笑覧』一八三〇年刊など）。「唐」辛子を用いて「南蛮」酢をつくるとは、まさに食品に反映したエキゾチシズムが長く命脈を保つ好例といえるが、逆にそのことで言葉の概念を変容させてもきた。

(22) 明和六年（一七六九）成『物産書目』（公益財団法人平賀源内先生顕彰会所蔵）に拠る。

(23) 十八～十九世紀のロシアを中心とする世界情勢に関しては、藤本和貴夫・松原広志『ロシア近現代史―ピョートル大帝から現代まで』（ミネルヴァ書房、一九九九年）、田中良英『エカチェリーナ2世とその時代（ユーラシア・ブックレット）』（東洋書店、二〇〇九年）などの諸書を参考にした。

(24) 工藤平助が天明三年（一七八三）に田沼に献上した『赤蝦夷風説考』が蝦夷地検分の根拠となった。工藤には密貿易への対策を建言した『報国以言』（同年成）がある。なお、田沼意次に関しては大石慎三郎『田沼意次の時代（岩波現代文庫）』（岩波書店、二〇〇一年）、藤田覚『田沼意次　御不審を蒙ること、身に覚えなし（ミネルヴァ日本評伝選）』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）などを参照した。

(25) 漂流民への関心は漂流記の流布という現象をもたらした。中良は同時代随一の漂流記コレクターとして特記されるべき人である。拙稿「森島中良編『海外異聞』の位相―江戸時代漂流記集の成立と展開に関する考察―」（『洋学資料による日本文化史の研究』7、一九九四年）、同「漂流記に関する試論―文学ジャンルの問題として―」（全国大学国語国文学会『文学・語学』159、一九九八年）。なお、光太夫らの審問に当たった桂川甫周は、森島中良の兄であった（『北槎聞略』など参照）。

(26) 拙稿「「御構」試論―平賀源内論のためのエスキスⅡ」（『新見女子短期大学紀要』第15巻、一九九四年）。

(27) 『織出蝦夷錦』がその代表的なものである。小野保校訂『平賀源内異聞―織出蝦夷錦―』（私家版、一九八六年）参照。

(28) タタール海峡、韃靼海峡などとも呼ぶ。最狭部にもネヴェリスコイ水道、黒龍水道など、さまざまな呼び名があり、この海峡の周辺で民族と国家の興亡が続いたことを示している。

(29) 日本最初の地理の教科書である明治六年（一八七三）刊『小学地理』（文部省編纂）に載る「東半球之図」は、多くの日本人が最初に見た日本地図であるが、小さいうえに北海道・本州・四国がつながって見える不完全なものであった。明治初期の教科書出版に関しては、稲岡勝「明治前期教科書出版の実態とその位置」（『出版研究』16、一九八五年）を参照。

(30) 源内が故郷を離れて江戸へと出たのは学校をつくるためであったという証言が、太田南畝の『奴師労之（やっこだこ）』（一八二一年成。『燕石十種』に拠る）に

載る。従来の評伝ではほとんど触れられることがなかったが、南畝は随筆中に繰り返し源内の回想を記しており、源内への敬愛の姿勢を終生崩さなかった門人格の一人であるため、この証言には十分な信憑性がある。従来ほとんど注目されてこなかった源内の教育者としての側面には、今後光が当てられて行くものと考えている。

(31) 大阪商業大学開講科目「日本文化事情」における学生へのアンケートによる。二〇二一年度受講者五五七名。詳細については別稿を用意したい。

(32) 田中優子監修『別冊太陽　平賀源内』（平凡社、一九八九年）、「【源内と博物学】眼と行動の博物学」（荒俣宏　聞き手・田中優子）。

(33) 添田仁「18世紀後期の長崎における抜荷観 ―唐貿易を中心に―」（『海港都市研究』3、二〇〇八年）など参照。密貿易である以上、統計が存在するわけでも当事者の証言がまとまって残るわけでもない。ロシアをはじめとする諸外国の接近が貿易とそのための開港を求めてのものであったことは、すでに各地で個的な交易が行なわれていたことを示唆するが、逆にそれが十分な取引量に達しなかったことをも暗示している。

(34) それは朝鮮国への公文書偽造（柳川一件、一六三一年）のように、時に調整という範囲を超えたものとなった。あるいは琉球王国に対する薩摩藩の陰然たる影響力のように、国家間の枠組みをはみ出したものであることもあった。

(35) 対馬の文化特性に関しては、『対馬国志』（全三巻、「対馬国志」刊行委員会、二〇一〇年）など、主に永留久恵氏の著作に拠る。

(36) 田村すゞ子『アイヌ語の世界（新装普及版）』（吉川弘文館、二〇二〇年）など参照。

(37) 伝 許筠著・野崎充彦訳注『洪吉童伝（東洋文庫）』（平凡社、二〇一〇年）、仲村修編『韓国古典文学の愉しみ〈下〉洪吉童伝 両班伝ほか』（白水社、二〇一〇年）など参照。

(38) 石上敏校訂『森島中良集（叢書江戸文庫）』（国書刊行会、一九九四年）「解題」を参照。

(39) 注（27）の『平賀源内異聞―織出蝦夷錦―』参照。それらの実録体小説・戯作小説は、源義経の渡海伝承をなぞるように源内自身の蝦夷渡航伝説が語られる要因ともなった。

(40) 拙稿「源内・人参（にんじん）・放屁漢（へひりおとこ）」（江戸文学年誌の会編『'89江戸文学年誌』ぺりかん社、一九八九年）。

(41) 拙稿「明・清の産業技術書と源内」（『文化サロン源内』24、二〇二二年）。

(42) 参府の定宿となった長崎屋を中心に江戸蘭学者たちの間に浸潤した情報のほうがむしろ日本文化に大きな影響をもたらした。注（14）の片桐一男『それでも江戸は鎖国だったのか―オランダ宿 日本橋長崎屋』など参照。

(43) 世界のチャイナタウンの数は公式な統計がない。ただ、中国国務院僑弁僑務幹部学校（二〇〇五）によれば、二〇〇〇年の時点で華人（中国系移

住者）の数は一六一か国に約四千万人が認められるという。張 長平「華人の世界分布と地域分析」（『国際地域学研究（東洋大学）』12、二〇〇九年）参照。

(44) 原題「夜宴」、二〇〇六年公開（フォン・シャオガン監督、チャン・ツィイー主演）。

(45) 中村幸彦校注『風来山人集（日本古典文学大系）』（岩波書店、一九六一年）。

(46) 船舶や航空機のエンジンとなり、時には自動翻訳機や強力扇風機となり、その陰に隠れれば透明人間にもなるという万能の「羽扇」は、源内のエンジニアとしての知見と才能を反映したものだが、日本の説話・物語には「如意宝（にょいほう）」と呼ばれるアイテム（たとえば打出の小槌）が登場する。また、落語の扇はあらゆるものに変化して万能の役割を果たす。ちなみに、源内の門人格である烏亭焉馬（うていえんば）（立川流の祖である立川焉馬）は江戸落語の中興を果たし、源内と落語は無縁ではなかった。延広眞治『落語はいかにして形成されたか（叢書 演劇と見世物の文化史）』（平凡社、一九八六年）参照。

(47) 実在人物である講釈師・深井志道軒の若き頃を仮構している。まさに「見てきたような嘘をつき」と言われる主人公に仮託して、源内は世界旅行の夢を語るのである。斎田作楽『狂講深井志道軒』（平凡社、二〇一四年）など参照。

(48) 「風流」を描く滑稽小説のルーツが「唐」（中国）にあるという源内の認識を反映したものだろう。明和六年（一七六九）には、源内が明の笑話本『笑府』を抄訳したとされる『刪笑（さん）府』が出版されている。

(49) 拙稿「〈通〉論の継承と断絶—源内・中良・京伝—」（『大阪商業大学論集』第2巻第2号（142号）、二〇〇六年）。

(50) 源内が意識していたのは、女護が島めざして出帆する場面で終わる井原西鶴の『好色一代男』（一六八二年刊）であろう。『根無草後編』（一七六九年刊）に西鶴への私淑を汲み取ることのできる描写がある。

(51) 井上隆明『平秩東作の戯作的歳月　江戸天明文壇形成の側面』（角川書店、一九九三年）参照。

(52) 拙稿「平賀源内の思想史的位置」（『新見女子短期大学紀要』第13巻、一九九二年）。

(53) 源内の晩年の戯作は、ほぼ学問的な論争をモチーフとする。拙稿「〈講話本〉考—平賀源内の戯作を中心に、ジャンルの論として」（『日本文学』第46巻第2号、一九九七年）。

(54) 注（52）の拙稿「平賀源内の思想史的位置」に論じた。

(55) そのような認識を最初に言表した日本人の一人が源内であり、それは「江戸っ子」という言葉の出現と同時期であった。西山松之助『江戸ッ子（江戸叢書）』（吉川弘文館、一九八〇年）。それから一五〇年後に日本最大の都市という称号を手に入れた「大大阪」が、「もはや東京など敵ではない」

とでもいうように「東洋一」の呼称でみずからを呼ぶようになったのと、よく似た経緯が考えられる。「東洋一」については、拙稿「花園競馬場をめぐる断想―近鉄・万博・ラグビー場」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』12、二〇一〇年）参照。

(56) 注（45）の『風来山人集』「解説」参照。より正確には二人目であるが、一人目の正体が明らかではない。

(57) 注（4）の『江戸文学』第32号（ぺりかん社、二〇〇五年）、「特集：江戸文学と異国情報」など参照。また、『風流志道軒伝』と『根南志具佐』については、拙稿「『風流志道軒伝』と『根南志具佐』―成立の先後関係について―」（『岡大国文論稿』26、二〇〇八年）参照。

(58) 当時の書籍（版本・写本いずれも）の流通は、大半が貸本によって担われた。一点の貸本は、およそ五十回にわたって借りられたという統計もある。その一方で、いわゆる「大名本」のように買われたままほとんど読まれることなく死蔵された本もあり、刷り出された本が平均三十回読まれたと仮定すると、三千部というのは単純計算で九万回読まれたことになる。しばしば落語で演じられるように、本が読まれる（音読される）場には、その周辺に何人かの聞き手がいることが少なくなかった。以上がこの推定の根拠である。長友千代治『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）、前田愛「音読から黙読へ」（『近代読者の成立』有精堂、一九七三年）など参照。

(59) 拙稿「『根南志具佐』の方法―江戸のエロチシズム―」（『都大論究』26、一九八九年）。

(60) 幸島家旧蔵「鉱山記録」（現在所在不明）。注（45）の「解説」等に拠る。

(61) ただしウニコウル（一角獣。正体はクジラの一種であるイッカク）やボウゴル・ストロイス（駝鳥）など、本草学に由来する海外情報については、しばしば衒学的に言及される。

(62) 注（53）の拙稿「〈講話本〉考―平賀源内の戯作を中心に、ジャンルの論として―」。

(63) 拙稿「小本型談義本出版の背景一斑―山金堂、変じて山釜堂となる―」（『国文学』第42巻第9号、一九九七年）。

(64) たとえば、注（63）の拙稿を収めた『国文学』（学燈社）一九九七年九月号（特集「メディアは変わる　近世の出版―本屋と作者―」）を参照。

(65) 成田龍一「歴史総合 新科目の狙い（インタビュー）」（『朝日新聞』二〇二二年三月三〇日、朝刊）など参照。

(66) 拙稿「源内門人としての朋誠堂喜三二―『高漫斉行脚日記』の世界―」（『近世文芸』72、二〇〇二年）。

(67) 本来であれば、テキスト内の表現に即して平賀源内の海外認識の検討を行なうべきであったが、本稿は外延の記述に終始した。別稿を期したい。

【付記】

本稿には、現代的観点から見て人権侵害に当たる差別語・罵倒語などを一部に含んでいる。特にいくつかの引用文中にそれらを含むが、決して差別や罵倒といった人権的な違犯行為を容認するわけではない。以上を付記させていただく。